届け 世界の果てまでも

令和４年１０月１３日　No．３９　文責　校長　飯久保一男

「のび」を評価する

６年生が陸上記録会への出場に向けて，練習に取り組んでいます。様々な陸上記録会の記憶がありますが，毎年，陸上記録会の練習が始まると思い出すのは，白根□□小で担任したＴくんのことです。

Ｔくんは，体が大きく，ちょっとぽっちゃりした体型でした。野球のスポーツ少年団に所属し，キャッチャーをやっていました。

陸上記録会の取り組みは，最初に全員の全種目の記録をとることから始めました。その記録は子どもたちが出場種目を決めるための参考にしました。小笠原小でも同じように取り組んでいます。

Ｔくんの「ソフトボール投げ」の最初の記録は５５ｍでした。前の年の陸上記録会の男子ボール投げの１位の記録は４８ｍでしたので，Ｔくんはボール投げに出場すれば，練習する前から１位をねらえる力をもっていました。私はＴくんはボール投げに出場するだろうと思っていました。

ところが，Ｔくんが選んだのは「１０００ｍ走」でした。Ｔくんの１０００ｍ走の記録は入賞はおろか，学年の中でも上位ではない記録でした。私はＴくんを呼び，ボール投げに出場することをすすめました。そのときは，Ｔくんは私のすすめに応じて「じゃぁ，ボール投げに出場します。」と答えたのですが…。

次の日，Ｔくんが私のところにきて「やっぱり，１０００ｍの方が記録がのびそうだから，ボール投げじゃなくて，１０００ｍに出ます。」と言ってきました。私は，ボール投げなら１位がねらえると話したのですが，Ｔくんは意志を変えず，１０００ｍ走に出場することになりました。つまりＴくんは，１位がねらえる種目があるのに，自分の記録をのばしたいと，苦手で，体力的に厳しい１０００ｍ走を選んだのです。

私は，陸上記録会の取り組みを始めるにあたり，６年生全員に

「自己新記録をめざす取り組みをしよう。

入賞して賞状をもらう人だけが，がんばったということではない。

練習を積み重ねて，自分の中で新記録を出せたら，それが最高のことだ。」

という話をしていました。私自身が子どもたちに話した内容を逆に意識していなかったと，Ｔくんに教えてもらったような気がしました。

陸上記録会当日，Ｔくんはもちろん１０００ｍ走に出場しました。後方を走っていたＴくんでしたが，完走し，自己記録を大幅に縮めたと，とても喜んでいました。

昨年の陸上記録会　小笠原小チーム
４００ｍリレーのスタート

子どもを評価するときに，周りの子どもたちと比較して評価をすると，Ｔくんの１０００ｍ走の記録は，いい評価にはなりません。しかし，その子の「のび」を評価すれば，Ｔくんは大幅に自己記録をのばしていますので，いい評価になります。

私たち教職員は，子どもたちに指導をするということは同時に，子どもたちを評価することになります。その子の評価は，その子の「のび」を見るようにしています。

今年はあまり授業ができませんでしたが，水泳の学習の評価を例にするとわかりやすいと思いますので，もう少し付け加えます。

子どもたちには個人差がありますので，始めから全員が泳ぐ力を同じようにもっていません。これが大前提です。それなのに，

「２５m泳げたら，評価はA」

という評価の基準をつくってしまったらどうでしょう。

□授業前から２５m泳げている子どもは，授業をする前にすでに，評価はAです。

□泳げなかった子が，よく学習して，２０m泳げるようになりましたが，評価はAになりません。

これでは「公平」な評価とはいえません。

それぞれの子どもが授業でどれだけ「のび」たのかを評価するとどうでしょう。

〇２５m泳ぐ力のあった子が５０m泳げるようになりました。　←評価A

〇１０m泳ぐ力のあった子が２５m泳げるようになりました。　←評価A

〇泳げなかった子が５m浮いて進めるようになりました。　←評価A

となります。

もちろん，評価をするためには，教師の指導が必要であることはいうまでもありません。泳ぐ力のある子をさらにのばす指導，少し泳ぐ力のある子をもっと泳げるようにのばす指導，泳げない子を泳げるようにする指導など，これらの指導があってこそ，評価ができます。そのために，私たち教職員は研修を重ね，指導力を磨いています。

子どもをほめるときも，叱るときも「他と比べてはいけない」ということがよくいわれます。この紙面でも何度か書いてきました。十人十色といわれるように，子どもが１０人いれば，それぞれの子どもに「よさ」があり，課題があります。つまり個人差です。全員が同じ力をもっている状況で「用意ドン」と一斉にスタートするということはそうあることではありません。

すぐにできるようになる子，なかなかできない子，できているためにサボり始める子，できるようになるために努力できる子，なかなかできないのであきらめかけてしまう子…，様々な子がいます。その子の力を理解して，その力を少しでものばすように指導し・支援した者が，その子を評価できるのだと思います。

保護者の皆さんは，誰よりも子どもを理解していると思います。他の子と比較してほめる・叱るということはオススメできませんが，逆に，子ども自身が周りの子と比較して，自分はできない，自分は劣っていると思ってしまうことがあります。そんなときは，何が「のび」ているのかを話してやることが一つの解決策です。また，なかなか「のび」につながっていないときは，小さなステップで，こういう目標でがんばろうと励ますことで子どもは切り替えられると思います。

２６歳になる次男は身長が１８５㎝あります。長男より成長が１年早かったと思います。
長男が３年のとき着たお下がりを次男は２年のときに着ていました
次男が６年のとき，ミニバス監督だった私は，中学ではバスケ部への入部を勧めました。
「やってもいいかな」という返事でしたので，バスケットのボールを買ってやりました。
ところが陸上記録会で，長男と同じ６０mハードルに出場し，上位の成績を残しました。
長男が中学の陸上でもハードルが好成績だった影響もあり，迷わず陸上部に入りました。
買ってやったバスケットボールは，玄関のスミでほこりをかぶって転がっていました…。